

マリ・デル

MARI D'ELLE

アントン・チェーホフ Anton Chekhov

青空文庫

その晩は身体からだがあいていた。オペラの歌姫のナターリヤ・アン
ドレーエヴナ・ブローニナ（嫁入り先の姓で言えばニキーチナだ
が）は、全身を安息にうち任せて寢室に横になっていた。彼女は
快い夢見ごこちのうちに、どこか遠い町にお祖母さんや伯母さん
と一緒に暮している自分の小さな娘のことを思い浮べる。……彼
女にとっては見物や花束や新聞の短評や最負の人々よりも、この
子供の方がよっぽど大切だった。子供のことなら夜明けまで思い
つづけていてもよかった。彼女の心は幸福と平和でいっぱいにな
っている。ただ一つの願いは、こうして誰にも邪魔されずに横た
わって、まどろむともなく自分の小さな娘を夢みていることだけ

であつた。

ふと、歌姫はぎよつとして眼を大きく見開いた。玄関で急に粗々しいベルの音がしたのである。十秒もたたぬうちに第二のベルが鳴り、また第三のベルが鳴る。やがて扉がどたんどたん開け放たれて、誰かが馬のように足を踏みならし、大きな鼻息を立てながら、寒いのでふうふう言いながら玄関に上つて来た。

「畜生め、外套掛ける場所もないじゃないか！」と歌姫の耳に嘎れたバスが響いて来る、「有名な歌姫の君、このざまを御覧じませ、だ。年五千も取るくせに、帽子掛け一つ買えないんだ！」

「うちの人だわ」と歌姫は眉を顰めた、「きつとまた誰か泊り客を引っぱって来たんだわ。……ああ、堪らない。」

もう平和どころではなかった。誰かが立てるとても大きな鼻息と、ゴム靴を脱ぎ棄てる物音とがやつとのことで鎮まると、こんどは彼女の寢室の中を誰やら抜き足で歩いている。……それは彼女の良人、つまり女優マリ・デルの夫であるデニス・ペトロヴィチ・ニキーチンであつた。一陣のひやりとする風とブランデーの臭が彼のお土産だ。彼はいつまでも寢室の中を歩き廻っている。苦しうな息を吐き、暗闇の椅子に躓きながら、どうやら何か探しているらしかった。……

「何探してるのよ？」と彼の妻はその騒ぎが我慢しきれなくなつてとうとうどなった、「あんたのお蔭で目が覚めちまつたわ。」
「僕あマッチを探してるんだよ。君あ……君あ、じゃ未だ睡つち

やいなかっただね。よおし、せいじや君に伝ことづけ言があつたぞ……宜しくつて言いやがったつけが……ど忘れしたぞ……ほら、しよつちゆうお前に花束を届けて来る薬罐の先生さ……ザグヴオーズキンよ。……いま奴と一緒にだつただ。」「

「あんな人の所へ何しに行つたの？」

「いや、別になんでもないさ……僕たちあこう仲よく坐つて話しかんで、一杯やつただけさ。なあナタリイ、お前がなんと言おうと俺ああの男は大嫌いだぞ。断然嫌いだぞ。ありや稀にみる大馬鹿だ。奴あ金持の資本家だ。奴にあ六十万からあるんだ、——と言つただけじゃ、お前にあ分るまいな。奴の金と来た日にや犬ころに大根をやつた程の役にも立たないんだ。つまり、自分でも食

いやがらない癖に、他人にも遣らないんだ。金あ、こう循環しなくちあいけない。ところが奴ときたら確り握りこんでやがって、離すのをびくびくしてるんだ。……居眠りしてる資本が何になるもんか。居眠り資本は草の葉っぱも同然さ。」

マリ・デルは暗闇のなかを手さぐりにベッドの端に辿りついて、ふうふう言いながら妻の足の所に坐った。

「それどころか、居眠り資本は害毒さ」と彼は続ける、「なぜロシヤじゃ事業が不振なのか知ってるかい。そりや居眠り資本がどつさりあるからさ。投資をびくびくしてやがるんだ。ところが、イギリスとなりやあ、まるで訳が違わあ。……なあ、おい、イギリスにあザグヴオズキンみたいな変てこな奴あ一人だつて居ない

んだ……あすこじや一文の金だって循環してるんだぜ……そうとも……あすこじや銭函に錠を掛けとくような吝な野郎はいないんだ。……」

「さあ、もう沢山よ。私、睡いんだから。」

「もう直き、もう直き……なんの話をしてたっけなあ？ ああ、そうだ……この世智辛え世の中によ、ザグヴオズキンみたいな野郎はぶらんこ往生だつて勿体ないくらいさ。……奴あ頓痴気のうえに悪党だ……つまり頓痴気だ。……僕が奴に担保なしの借金を申込んだつてそれがなんだ、——え、これほど確かな投資はないことくらいあ三つ兎だつて御承知だぞ。ところがあの驢馬め、厭だつて抜かしやがる。一万出しやあ十万になつて返つて来るんだ。」

一年たちやあまた十万ほど転りこむんだ。僕あ頼むようにして話してやったんだぞ。……ところが奴あ出しやがらないんだ、大間拔め！」

「あんたは、まさか私からと言って借金を申込んだんじやないでしようね？」

「ふむ……妙な御質問だね……」とマリ・デルは機嫌を損ねた、「どっちみち、僕からって言った方が、お前からなんて言うよりや、奴にあ一万投げ出し易かろうぜ。お前はたかが女だ、ところが僕あこうみえても男一匹だ、しかも事業好きの男と来てる。僕あどんな目論見を奴に話してやったか分かるかい？ 泡沫あぶくでも空中楼阁でもないんだ、そりやもう、ちやんと確實極まる、その肝腎

かなめつて奴さ。解りのいい人間にぶつかってみろ、この目論見だけで二万は投げ出すだろうぜ。僕がお前に話してやるとすりやあ、お前にだつてその事は解らあ。ただお前が……饒舌^{しゃべ}るんじゃないぞ……一言もだぞ……待てよ、お前にもう話したような気がするぞ。腸詰の皮のことを話したつけかな？」

「まあ、……だんだん伺つていますわ。」

「だからそう思つたんだ。……お前にあこの話の大眼目が分るかい？ 今じゃ食料品屋も腸詰屋も、腸詰の皮あわざわぎ高い金を払つて地方から取寄せるんだ。そこだよ、つまりコーカサスじゃあんな皮あ一文もしないんだ、みんな打っちゃつまうんだから、そいつをコーカサスから持つて来るんだ……さあそうなつたら、

ええお前、腸詰屋はいつたいどっちで買うと思うかい？　ここの屠殺場か、それとも僕からか？　そりやもちろん僕から買いこむにきまつてるさ！　だって値段が十分の一だからなあ。そこでひとつ考えてみようじゃないか——ペテルブルグやモスクワやまた他の中心地で、この皮の取引高が年々……まあ五十万ルーブルだとしてみよう。つまり最小限度に見積つてだ。そうすると、つまりだ……」

「その話、明日でもいいでしょう……後でも……」

「うん、まあそうだ。お前はねむいんだったね、御免よ……僕バルドンはもうすぐ……いや、お前が何をしようと望もうと、資本さえありあどこでだって、どこへ行つたつて甘い仕事が出来るんだ。：

…資本さえありあ只の煙草の吸口からだつて百万長者になれるんだ。……例えばお前の芝居の方にしてもだ。いったいなぜレントフスキイが痛い目を見たか分るかい？ 訳あすこぶる簡単さ。奴あ初手から間違つてたんだ。奴あ資本もないくせに、いきなりたんぺい急に始めやがったんだ。……まず最初に資本の用意をしてから、そろそろと用心深くやりさえすりやよかつたんだ。……いま時じや芝居でひともうけするなんざあ、私立だつて国民劇場だつて易々たるものさね。……立派な脚本を上演して、場代をうんと安くして、それで当りさえすりあ、初めの年に十万は儲かるさね。……お前にあ分らないが、僕の言うことあ本当なんだ。……お前は資本を貯め^たとくのが好きなんだ。ね、そうだろう？ だか

らお前はつまり、頓痴気のザグヴオズキンと同じことなのさ。ただ積んで置くだけで、どうしようってこともないんだ。……人の言うことなんかで聴こうともしないんだ……循環させるつもりがありや、いつそ初めから齷齪しない、って連中なんだ。……私立劇場なら、初めは五千ありや充分なんだぜ。……だが勿論レントフスキイみたいなへまはやらないぞ……ただ内輪に始めるんだ……小規模にな。僕はもう支配人も探し出してあるし、適当な小屋も物色したるんだ。……無いのは金だけさ。……お前が少し解りのいい女なら、五分利なんて吝なのとはとつくの昔にお別れができるになあ……あんな優先株なんて……」

「いいえ、有難^{メルシ}う……もうあんたには散々騙り取られたことよ……

…さ、一人にして頂戴、もう罰は充分ですわ……」

「お前が女だてらに議論を吹っかけるんなら、僕あ勿論……」と
ニキーチンは起き上りながら嘆息した、「勿論そりや……」

「さ、一人にして下さいったら……ね、向うへ行つて、私を睡ら
して頂戴……あなたの馬鹿げた話はもう沢山よ。」

「ふん……そりや極つてるさ……勿論！ 騙りだつて……掠奪だ
と……出した物あ覚えてるが、入った物あ忘れるつてね。」

「私、あんたから何ひとつ貰いはしなくつてよ。」

「本当かい？　じゃ僕たちがまだ有名な唄うたいにならない前は、
いったい誰の金で暮してたんだ？　そいから、もうひとつ、いつ
たい誰がお前を貧乏ぐらしから拾い上げて幸福にしてやったんだ

？　ひとつ伺いたいもんだね。それとも、もう忘れたのかい？」

「さ、寢床へいらつしやいよ。向うへ行つて、そんな事は綺麗さつぱりと夢に流しておしまいなさいよ。」

「僕を酔払い扱いにしようつてんだな？……貴婦人のお眼に僕がそんな卑しく見えるんなら、……僕あさつさとこの家から出て行くさ。」

「じゃそうして。なかなかいいことだわ。」

「こつちも望むところだ。このうえ卑しいものにあなりたくないからな。じゃ出て行くぞ。」

「まあ有難い！　さ、さつさと出て行って頂戴！　さばさばしちまうわ。」

「そりや結構。ひとつどうなるかみようぜ。」

ニキーチンは何やらぶつぶつ独り言をいっては椅子に躓きながら、寢室を出て行った。やがて玄関の方から低いつぶやきやゴム靴を乱暴にひきずる音が聞えてきて、とうとう扉がばたんと閉った。マリ・デルは本気になって憤って、出て行ったのだ。

「ああ、有難い、あの人は出て行ったわ」と歌姫は思った、「やつと睡れるわ。」

そしてまたうとうと睡りに落ちながら、彼女は自分のマリ・デルのことを考えた。彼がどんな人間であり、またどうしてこの災難が舞いこんで来たかを。以前には彼はチルニゴフに住んで、そこで帳簿係をやっていた。その頃はマリ・デルとしてではなく、

ただ普通の無名の存在として、彼は毎日の勤めに出かけて行き、月給を貰つて、その気紛れな目論見にしてもたかだか新しいギタアとか、流行のズボンとか琥珀のパイプとかの範囲を出なかつた。その彼がこんなに変つてしまったのは『花形の良人』になつてからの事であつた。彼女が初めて自分の舞台に立ちたい希望を言い出したとき、彼は喚き立てたり憤慨したり彼女の両親に言いつけたりした挙句、彼女を追い出してしまった。で、彼女は夫の許しなしに舞台に立つ羽目になつた。その後、新聞や人の口から彼女が大層な収入だと聞き知ると、彼は『彼女を許し』そして帳簿を投げ出して彼女の食客になつてしまった。

歌姫は自分の食客の姿をあらためて見直したとき、すっかりげ

っさりしてしまった。いったい、いつ、そして、どこでこの男は、新趣味や、上品さや、気取りや、優雅さを習ったのだろう。いったいどこでこの男は牡蠣だの様々なブルゴーニュ葡萄酒なんぞを覚えこんだのだろうか？ 彼に流行風な調髪や服装を教え、またナターシャと呼ばずに『ナタリイ』なんぞと呼ぶことを教えたのだろうか？

「不思議なことだわ」と歌姫は考えた、「昔あの人は月給だけで暮っていたのに、今じゃ日に百ルーブルあっても足りないんだもの。昔は何かおかしなことを言いはしまいかと小学生の前へ出てさえびくびくしていたのに、今じゃ公爵の前へ出たって馴れ馴れし過ぎるほどにするんだもの。……本当に賤しいわるもの奴。」

けれどその時、歌姫は再びぎよつとした。また玄関のベルが鳴つたのである。下女が腹をたてて、わざとスリツパをばたばた言わせながら扉を開けに行つた。また誰やらが入つて来て、馬みたいに足踏みをした。

「あの人は帰つて来たんだわ」と歌姫は思った、「いつになつたら平和な気持になれるんだろう？ 胸が悪くなるわ！」

彼女の柳眉はみるみる逆立った。

「待つてるがいい……今こそこの茶番のやり方を教えこんだげるから！ あんたは出て行くの！ この私が追い出してやる。」

歌姫は飛び上つて、跣足のままで駆け出した。そして自分の夫が寢室にしている応接間へ飛びこんだ。夫はちようど着物を脱い

で、それを椅子の上に丁寧に畳みかけているところだった。

「あんたは出て行ったのよ！」と彼女は憎悪に眼をきらきらさせながら言った、「何だってまた帰って来たの？」

「あんたは出て行ったのよ。さあ、どうぞたったいま姿を消して下さいまし。さ、たったいま！ 聞えるの？」

マリ・デルは咳払いをして、妻から眼をそらせながらズボン吊りを外した。

「ま、なんて人でしょう！ あんたが出て行かないなら、私が出て行くわ」と歌姫は跣足で地だんだを踏み、夫を血走った眼で睨みつけながら言いつづけた、「私が出て行くわ！ 聞えるの、あなたの耳！……恥知らずの、碌でなしの、わるものの、ごますり

め！ 出てらっしやい！」

「おい、おい、人様の前じや、ちつとは羞しがるものだぜ」と夫はつぶやいた。

歌姫はまわりを見廻した。すると、やっとその時、まるで役者みたいな感じの見知らぬ顔を見出した。……歌姫の裸の肩や跣足を見せられたので、すこぶる当惑しきって床に穴があればもぐりこみたいような顔つきだった。

「紹介しよう……」とニキーチンが言った、「ベズボージュニコフ、地方巡業の支配人だ。」

歌姫はきやつと叫んだまま、自分の寢室に駈け戻って行った。

「そうら、御覧の通りさ……」とマリ・デルは安楽椅子に大の字

なりに寝転びながら言った、「つい今の今までは蜜みたいにべたべたしてたんだ……わが愛人よ、可愛き君よ、いとしい人よ、接吻を、抱擁を、つて風にね。……ところが君、事ひとたびお金のことに及ぼうものならたちまち……御覧の通りさ……お金は君、偉大なものだよ……じゃ、お眠^{やす}み。」

一分の後はもう高鼾だった。

青空文庫情報

底本：「チエーホフ全集」 中央公論社

1960（昭和35）年10月15日初版発行

1976（昭和51）年8月10日再訂版発行

入力：米田

校正：阿部哲也

2011年1月29日作成

2012年2月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

マリ・デル

MARI D'ELLE

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 アントン・チェーホフ Anton Chekhov
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>